『就実論叢』第四五号　抜刷
就実大学・就実短期大学　二〇一六年二月二九日　発行

〈資料紹介〉

倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」

与謝野晶子自筆歌稿「覇王樹（しやぼてん）」「暑ぐるし」「おこたらむ」

加藤美奈子

就実論叢　第45号(2015)，pp.17-31

〈資料紹介〉倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」与謝野晶子自筆歌稿「覇王樹（しやぼてん）」「暑ぐるし」「おこたらむ」

加藤　美奈子

はじめに――倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」所収与謝野晶子自筆歌稿・書簡について

倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」（以下、「泣菫文庫」）所蔵の与謝野晶子自筆歌稿一二枚を、本論叢第四〇～四三号掲載の拙稿において紹介した（『就実論叢』二〇一一～二〇一四年）。「泣菫文庫」所収の泣菫宛晶子書簡一五通については、倉敷市編著『倉敷市蔵　薄田泣菫書簡集　詩歌人篇』（八木書店、二〇一五年三月）に、翻刻・注・解説を載せた。同書掲載の大正五年七月一七日付泣菫宛晶子書簡（書簡番号5）に同封されていたと推測される自筆歌原稿一枚（「輓歌　上田先生のために」）については、本論叢第四四号（二〇一五年）で紹介した。

本稿においては、先の一二枚の歌稿とは別に、封筒に収められ、書簡の添えられていない歌稿三枚について、図版・翻刻を掲載し、解説を加える。この晶子自筆歌稿は、洋封筒に三枚が収められた状態で所蔵されている。封筒裏に「三月九日　与謝野晶子」と自書され、消印の日付は、発信局印が大正三年三月九日（封筒表）、受信局印が大正三年三月一〇日（封筒裏）で、大正三年三月九日付の封筒であることがわかる。

以下、それぞれ原稿用紙一首目の初句を取って仮称するが、三枚は、「暑ぐるし」「おこたらむ」「覇王樹（しやぼてん）」の順に重ねられた状態で収められている。詠草の掲載状況から判断すると執筆年代は、「覇

王樹」（初出・大正三年三月一五日付「大阪毎日新聞」掲載）、「暑ぐるし」（初出・大正六年八月一一日～九月七日付「大阪毎日新聞」掲載）、「おこたらむ」（四首が歌集『火の鳥』（金尾文淵堂、大正八年八月）所収）の順となる。大正三年三月九日付で「覇王樹」を送付した封筒に、後の歌稿「暑ぐるし」「おこたらむ」の二枚があわせて収められたのだろう。なお、「泣菫文庫」所収の泣菫宛晶子書簡一五通の内には、これらの歌稿に同封された送付状と判断し得る年代・内容の書簡は確認出来ない。

原稿用紙は、「覇王樹」が「松屋製」、「暑ぐるし」「おこたらむ」が「神樂阪（ママ）山田製」である。晶子自筆歌稿一二枚及び「輓歌　上田先生のために」では、大正二年（本論叢第四一号掲載歌稿「湯あかりの後」）～大正五年七月（本論叢第四二・四四号掲載歌稿「萱の葉」「輓歌　上田先生のために」）の四枚が「松屋製」、大正六年五月（本論叢第四二号掲載歌稿【図版8】）～大正一〇年（本論叢第四二号掲載歌稿【図版3】【図版4】）の九枚が「神樂阪山田製」で、此度の三枚の原稿用紙の使用年代もこれに矛盾しない。

以下、晶子自筆歌稿三枚及びそれらを収めている封筒について、図版（後掲【図版1】～【図版5】）を掲載・翻刻する。倉敷市作成の「泣菫文庫」の目録番号は、資料の重ねられた順となっているが、前述の年代順に改め、紹介・掲載した。あわせて「大阪毎日新聞」の初出紙面を掲載した（【紙面①】～【紙面⑤】、国立国会図書館所蔵のマイクロフィルムからの複写による）。

【図版1】～【図版5】は、本学吉備地方文化研究所による撮影で、倉敷市の許諾を得て掲載した。担当の文化振興課・薄田泣菫顕彰会に御礼申し上げる。

一　与謝野晶子自筆歌稿「覇王樹」「暑ぐるし」「おこたらむ」

解題

封筒（表【図版1】・裏【図版2】）は、白の洋封筒を縦に用い、原稿用紙を四つ折りにして収めている。縦14.8㎝×横9.8㎝、洋紙の洋封筒で、「官製はがき」の大きさに相当し、左上に一銭切手（「菊切手」）二枚が貼られ、消印は、発信局印が切手の上に一箇所、裏面に着信局印が一箇所ある。表右上部がやや大きく破れ、住所の一部が欠損している。表の住所・宛名、裏の署名ともに、筆跡により晶子の自書と判断出来るペン書きである。

歌稿「覇王樹」「暑ぐるし」「おこたらむ」三枚の原稿用紙にはいずれも、一行目より一マスに一文字ずつインクのペン書きで短歌が記入され、一首を二行に収め、総ルビが付されている。用紙は、三枚とも数ミリの誤差はあるが、縦25.8㎝×横35.6㎝の洋紙、「B４」サイズに相当し、青罫の四〇〇字詰原稿用紙である。「覇王樹」一枚は「十ノ廿　松屋製」、「おこたらむ」「暑ぐるし」二枚は「十ノ二十　神樂阪（ママ）山田製」と、左下欄外に青で印刷されている。

「覇王樹」（【図版3】）は、欄外の記載はなく、短歌一〇首のみが

自書されている。一首目より六首目までが「覇王樹」の題で大正三年三月一五日付「大阪毎日新聞」（**【紙面①】**）に掲載された。七首目より一〇首までの四首は、『定本　與謝野晶子全集』一～二〇巻（講談社、昭和五四～五六年、以下『全集』）への所収がなく、初出・所収歌集等が現時点では確認出来ない。

「暑ぐるし」（**【図版4】**）は、右欄外に「与謝野晶子」署名があり、上方の記号が「△」のような形と思われ、それが薄れ「∴」のように図版では見える。三首ずつが三回にわたり「大阪毎日新聞」に掲載され、最後の一首は歌稿にない二首を加えて同様に掲載された。発表順は、最後の方の日付が古く、最初の方が新しくなっている。すなわち、一首目より三首目が大正六年九月七日付（**【紙面②】**）、四首目より六首目が同年九月一日付（**【紙面③】**）、七首目より九首目が同年八月一七日付（**【紙面④】**）、一〇首目が同年八月一一日付（**【紙面⑤】**）で、それぞれ三首が無題で載せられている。八月一七日、九月一日・七日の同じ紙面には、泣菫のコラム「茶話」も掲載されている。

「おこたらむ」（**【図版5】**）は、右欄外に「〇」、下方に「与謝野晶子」と署名があり、一〇首が自書されている。この内、歌集『火の鳥』（金尾文淵堂、大正八年八月）に四首が確認出来るが、初出は『全集』には記載されていない。六首は、『全集』への所収がなく、初出・所収歌集等が現時点では確認出来ない。

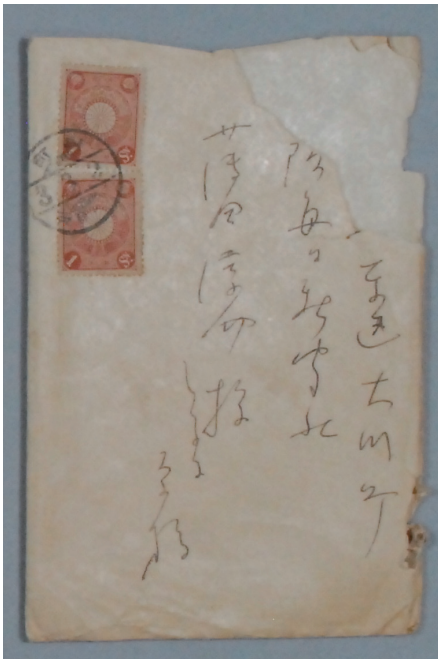
本論叢第四一号では、歌稿「湯あかりの後」の二首、歌稿「土ふみて」の四首が『全集』未所収であり、第四二・四三号では、九枚の自筆歌稿において計一五首が『全集』未所収であることを確認した。今回、三枚の自筆歌稿に記された三〇首の詠草の内、「覇王樹」の「大阪毎日新聞」に掲載されなかった四首と、「おこたらむ」の歌集『火の鳥』に所収されなかった六首の計一〇首が、『全集』未所収となっている。以上、「泣菫文庫」所収の晶子自筆歌稿は、総計一八枚で、自書された一四四首の内、二七首が『全集』に未所収であることが現時点で確認出来る。また、初出・所収歌集の確認出来る作品についても、表現の異同が見られる点にも注目すべきだろう。

二　与謝野晶子自筆歌稿「覇王樹」「おこたらむ」「暑ぐるし」

図版・翻刻

以下、薄田泣菫（本名・薄田淳介）宛の封筒（表**【図版1】**・裏**【図版2】**）と、それに収められた与謝野晶子自筆歌稿三枚の図版（**【図版3】**～**【図版5】**）を掲げ、翻刻を後に示した。翻刻における改行等は図版に準じている。字体は新旧ともに自筆に準じた。■は判読不能の箇所及び、文字の修正箇所で修正前の文字が不明であることを示し、修正後の文字の前に示した。また、修正前の文字が判読出来る場合、元の文字を〔　〕で修正後の文字の前に示した。□は翻字し難い部分を示し、その他注記も〔　〕内に示した。

【図版1】封筒表



【図版2】封筒裏

【図版1】封筒表―翻刻

〔上部欠損（大阪市ヵ）〕東区大川町
〔上部欠損（大ヵ）〕阪毎日新聞社
薄田淳介様

みもとに

□□〔みなヵ〕様

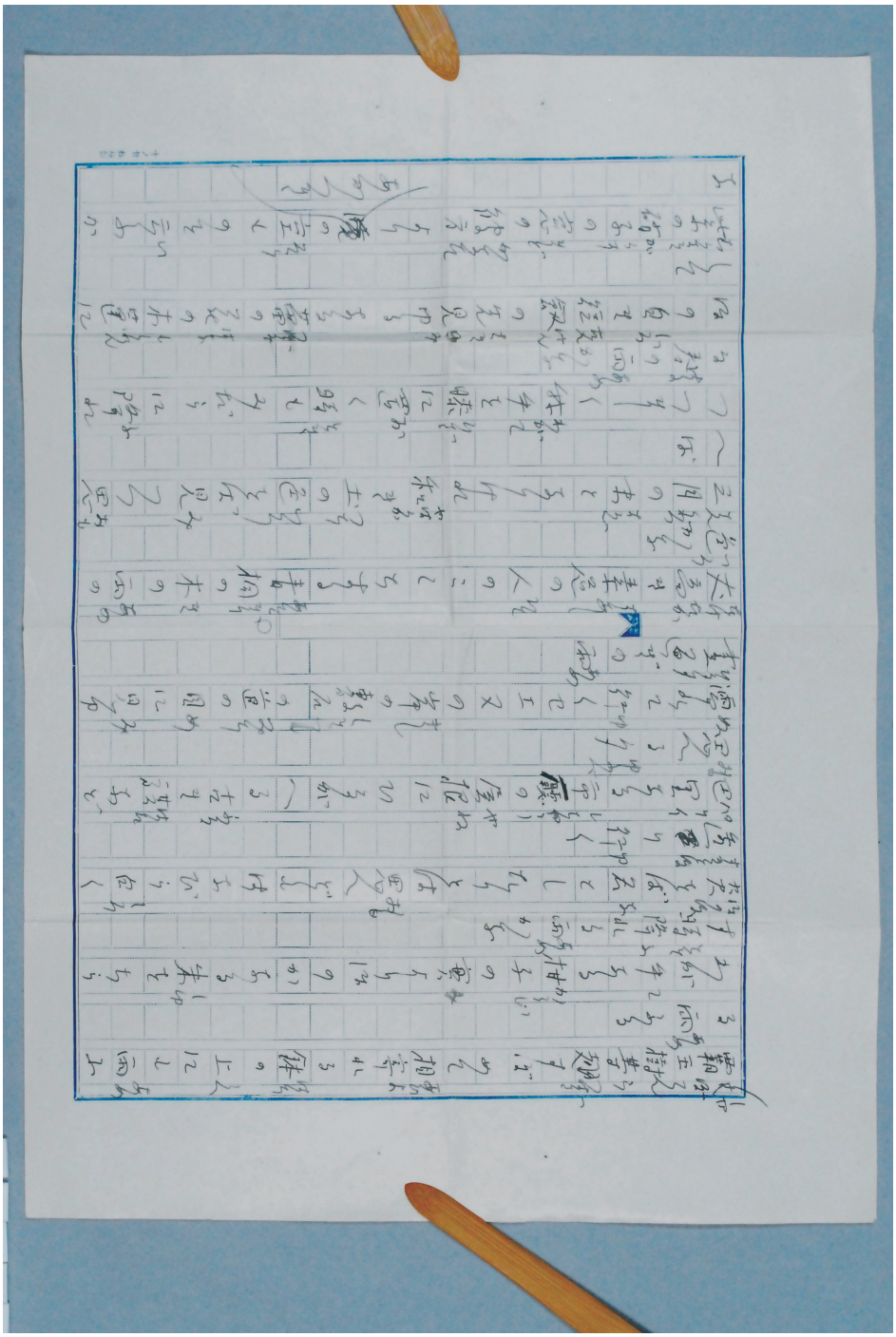
〔切手（一銭）二枚〕
〔発信局印〕■〔麹ヵ〕町／３３９／〔判読不能〕

【図版2】封筒裏―翻刻

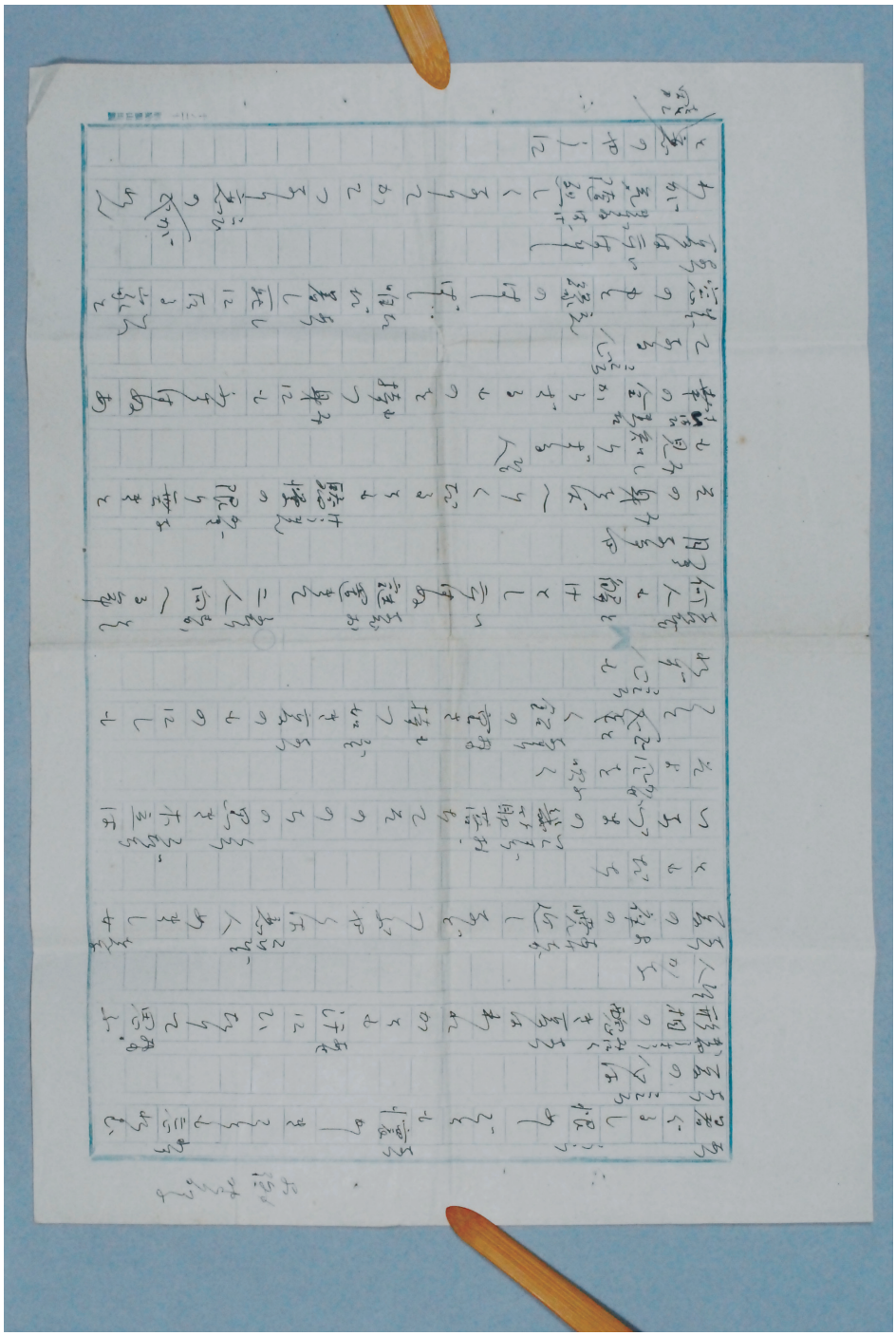
三月九日

与謝野晶子

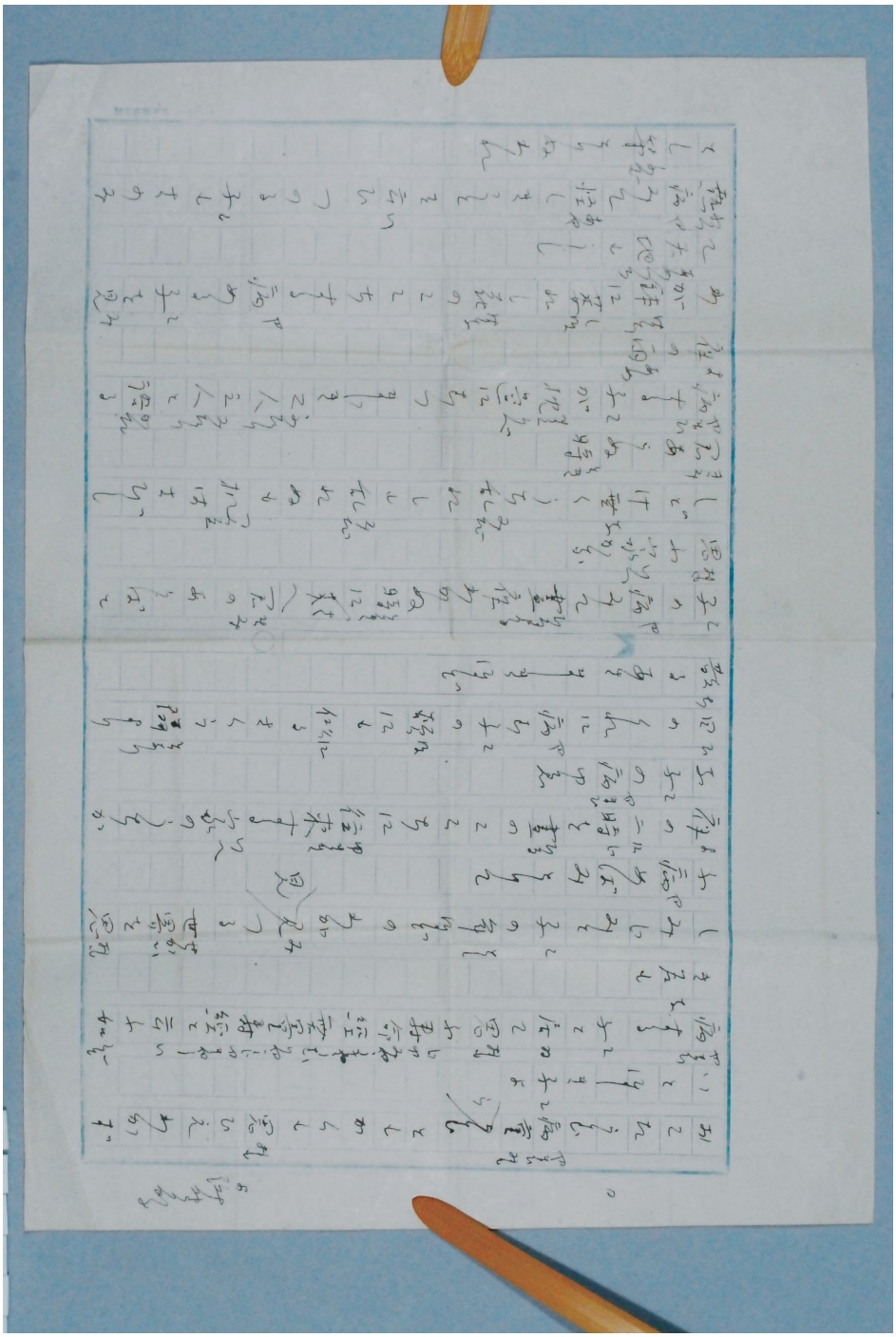
〔受信局印〕■■〔大阪ヵ〕中央／３３．10／前7―8



【図版3】与謝野晶子自筆歌稿「覇王樹」



【図版４】与謝野晶子自筆歌稿「暑ぐるし」



【図版5】与謝野晶子自筆歌稿「おこたらむ」

【図版3】与謝野晶子自筆歌稿「覇王樹」—翻刻

〔さ〕しやほてんらつばさ
覇王樹等翅すぼめて相寄れる鉢の上にも雨ふ
る雨ふる

わが手なる柑子の實よりほのかなる朱をちら
す時降れる雨かな

炎をば名としたりとは思へどもはなびら白く
透■り行く

巴里なる市廳の屋根にひるがへる古き旗など
思へる夕

濡れて行くセエヌの岸の敷石の道の目に見ゆ
晝過ぎの雨

丈高き素足の人のここちする青桐の木の雨の
色かな

三月の末となりけれ和き土の色をば見つつ思
へば

つつましく我手を膝に置く時もみだらに降れ
る春の雨かな

ほの白き短劔の先見■ゆるなる蕾の花の木蓮に
して

紫の硝子の窓の彼方より〔暁〕あかつきの空ものを云ふか
な

【図版4】与謝野晶子自筆歌稿「暑ぐるし」—翻刻

〔欄外〕　∴　　与謝野晶子

暑ぐるし恨めしごとも懐かしきことも忘れむ
夏の心は

形相の醜き夏はわれかとも汗にひたりて思ふ
人かな

夏の夜の暁近しなどつぶやくは恋人めきし女
ともだち

いなづまの幾筋落ちてそののちの黒き木立は
そよ風を吹く

こと■■ごとく鉛の重さ持つ如き夏のものにしも
れず心も

何人も解けとし云はぬ謎置きて二人向へる年
月なるや

その身をばへりくだるとも驕慢の限り無きと
も見知らざる人

幸の全からざるものを持つ身にもふさはぬあ
てなる心

窓のもと縁のはしばし唯だ暑し死にたる家と
夏は云はまし

わが気随烈しくなりてかこつなり恋の〔ご〕がれん
と〔恋〕男のやうに

【図版5】与謝野晶子自筆歌稿「おこたらむ」―翻刻

〔欄外〕○　　与謝野晶子

おこたらむ病重■らむともかくも思ひえわかず
いとほしき子よ
病する子と居て思ふ寿命 經 無量寿經と云ふ如
き名も
しみじみと子の年ほどのわが■見つる世界を思
ふ病めばみとりて
夜の二時を晝のここちに往來する家のうちか
な子の病ゆゑ
日のくれに病む子の頰にも似るさくら隣より
散るあさましきほど
子の病みて晝夜わかぬ時に■さへ君のあらばと
思ふ家かな
しどけ無くうち乱れしも乱れぬも机はさびし
君あらぬ時
病する子が枕邊にむつまじき二人三人と語る
夜の雨
わが鉢に萎れし花のここちする病める子を見
て天地もうし
熱病みて怪しきことを云ひつのる子もさのみ
とし筆とりぬわれ

三　与謝野晶子自筆歌稿「覇王樹」「おこたらむ」「暑ぐるし」

初出・所収歌集、異同

以下、歌稿順に詠草の初出・所収状況・異同を示す。底本は、『定本　與謝野晶子全集』一～二〇巻（講談社、昭和五四～五六年、以下『全集』）によった。表記等の異同を示す傍線は、引用者による（ルビの有無、字体の異同には傍線は用いず、テキストを併記することで示した）。

ゴシック体で自筆歌稿の翻刻を示した（文字の修正箇所の記号等は省略した）。〔拾遺〕は『全集』により、（　）内に初出年を示している。歌番号は、〔歌集〕〔拾遺〕ともに『全集』によった。

〔初出〕の「大阪毎日」は、「大阪毎日新聞」で、後掲の図版**【紙面①】**～**【紙面⑤】**を併せて参照し、掲載歌は紙面に準じて載せた。〔改全〕は、改造社版『與謝野晶子全集』（昭和八～九年）、異同は『全集』により、(1)～(5)は初句～五句を示す。

・　初出掲載、歌集未収録歌。〔初出〕に初出紙を示す。

○　歌集所収歌。〔歌集〕に所収歌集・歌番号を示す。

　　与謝野晶子『火の鳥』（金尾文淵堂、大正八年八月）

●　初出不明、『全集』・歌集未所収歌。

【紙面①】～**【紙面⑤】**〔初出〕の図版番号（後掲）。以下、**【①】**～**【⑤】**で示す。

【図版3】与謝野晶子自筆歌稿「覇王樹」一〇首

・覇王樹等翅すぼめて相寄れる鉢の上にも雨ふる雨ふる
〔初出〕覇王樹が翅すぼめて相寄れる鉢の上にも雨ふる雨ふる
（「大阪毎日」（大正三年三月一五日）「覇王樹」【①】）
〔拾遺（大正三年）〕173

・わが手なる柑子の實よりほのかなる朱をちらす時降れる雨かな
〔初出〕わが手なる柑子の實よりほのかなる朱をちらす時降れる雨かな
（「大阪毎日」（大正三年三月一五日）「覇王樹」【①】）
〔拾遺（大正三年）〕174

・炎をば名としたりとは思へどもはなびら白く透り行く
〔初出〕炎をば名としたりとは思へども花びら白く透りゆく
（「大阪毎日」（大正三年三月一五日）「覇王樹」【①】）
〔拾遺（大正三年）〕175

・巴里なる市廳の屋根にひるがへる古き旗など思へる夕
〔初出〕巴里なる市廳の屋根にひるがへる古き旗など思へる夕
（「大阪毎日」（大正三年三月一五日）「覇王樹」【①】）
〔拾遺（大正三年）〕176

・濡れて行くセエヌの岸の敷石の道の目に見ゆ晝過ぎの雨
〔初出〕濡れて行くセエヌの岸の敷石の道の目に見ゆ晝過ぎの雨
（「大阪毎日」（大正三年三月一五日）「覇王樹」【①】）
〔拾遺（大正三年）〕177

・丈高き素足の人のここちする青桐の木の雨の色かな
〔初出〕丈高き素足の人のここちする青桐の木の雨の色かな
（「大阪毎日」（大正三年三月一五日）「覇王樹」【①】）
〔拾遺（大正三年）〕178

●三月の末となりけれ和き土の色をば見つつ思へば
〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未収録

●つつましく我手を膝に置く時もみだらに降れる春の雨かな
〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未収録

●ほの白き短劔の先見ゆるなる蕾の花の木蓮にして
〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未収録

●紫の硝子の窓の彼方よりあかつきの空ものを云ふかな
〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未収録

【図版4】与謝野晶子自筆歌稿「暑ぐるし」一〇首

・暑ぐるし恨めしごとも懐かしきことも忘れむ夏の心は

〔初出〕暑ぐるし恨めしごとも懐かしきことも忘れむ夏の心は

（「大阪毎日」（大正六年九月七日）【②】）

〔拾遺（大正六年）〕175

・形相の醜き夏はわれかとも汗にひたりて思ふ人かな

〔初出〕形相の醜き夏はわれかとも汗にひたりて思ふ人かな

（「大阪毎日」（大正六年九月七日）【②】）

〔歌集〕形相のみにくき夏はわれなりと汗にひたりて思ふ人かな

（『火の鳥』439）

・夏の夜の暁近しなどつぶやくは恋人めきし女ともだち

〔初出〕夏の夜の暁近しなどつぶやくは戀人めきし女ともだち

（「大阪毎日」（大正六年九月七日）【②】）

〔拾遺（大正六年）〕176

・いなづまの幾筋落ちてそののちの黒き木立はそよ風を吹く

〔初出〕いなづまの幾筋落ちてそののちの黒き木立はそよ風を吹く

（「大阪毎日」（大正六年九月一日）【③】）

〔拾遺（大正六年）〕168

・ことごとく鉛の重さ持つ如き夏のものにしもれず心も

〔初出〕ことごとく鉛の重さ持つ如き夏のものにしもれず心も

（「大阪毎日」（大正六年九月一日）【③】）

〔拾遺（大正六年）〕169

・何人も解けとし云はぬ謎置きて二人向へる年月なるや

〔初出〕何人も解けとし云はぬ謎置きて二人向へる年月なるや

（「大阪毎日」（大正六年九月一日）【③】）

〔歌集〕天地に解けとも云はぬ謎置きて二人むかへる年月なるや

（『火の鳥』440）

・その身をばへりくだるとも驕慢の限り無きとも見知らざる人

〔初出〕その身をばへりくだるとも驕慢の限り無きとも見知らざる人

（「大阪毎日」（大正六年八月一七日）【④】）

〔拾遺（大正六年）〕149

・幸の全からざるものを持つ身にもふさはぬあてなる心

〔初出〕幸の全からざるものを持つ身にもふさはぬあてなる心

（「大阪毎日」（大正六年八月一七日）【④】）

〔歌集〕幸は全からざるものながら心は貴にまどかなりけり

（『火の鳥』438）

・窓のもと縁のはしばし唯だ暑し死にたる家と夏は云はまし
〔初出〕窓のもと縁のはしばし唯だ暑し死にたる家と夏は云はまし
（「大阪毎日」（大正六年八月一七日）【④】）
〔拾遺〕（大正六年）150

・わが気随烈しくなりてかこつなり恋のがれんと男のやうに
〔初出〕わが氣隨烈しくなりてかこつなり戀のがれんと男のやうに
（「大阪毎日」（大正六年八月一一日）【⑤】）
〔歌集〕身の病めば氣隨つのりて思ふなり戀のがれんと男の如く
（『火の鳥』441）

【図版5】与謝野晶子自筆歌稿「おこたらむ」一〇首

・おこたらむ病重らむともかくも思ひえわかずいとほしき子よ
〔歌集〕おこたらん病重らんともかくも思ひえ分かずいとほしき子よ
（『火の鳥』124〔改全〕初版同）

●病する子と居て思ふ寿命 經無量寿經と云ふ如き名も
〔初出〕不明〔歌集〕未所収 ＊『全集』未収録

・しみじみと子の年ほどのわが見つる世界を思ふ病めばみとりて
〔歌集〕しみじみと子の年ほどのわが見つる世界を思ふ病めば看護りて
（『火の鳥』119〔改全〕初版同）

・夜の二時を晝のここちに往来する家のうちかな子の病ゆゑ
〔歌集〕夜の二時を晝の心地にゆききする家のうちかな子の病ゆゑ
（『火の鳥』122〔改全〕初版同）

●日のくれに病む子の頬にも似るさくら隣より散るあさましきほど
〔初出〕不明〔歌集〕未所収 ＊『全集』未収録

●子の病みて晝夜わかぬ時にさへ君のあらばと思ふ家かな
〔初出〕不明〔歌集〕未所収 ＊『全集』未収録

・しどけ無くうち乱れしも乱れぬも机はさびし君あらぬ時
〔歌集〕しどけなくうち亂れしも亂れぬも机は淋し君あらぬ時
（『火の鳥』118〔改全〕(3)(4)みだれぬも机は寂し）

●病する子が枕邊にむつまじき二人三人と語る夜の雨
〔初出〕不明〔歌集〕未所収 ＊『全集』未収録

●わが鉢に萎れし花のここちする病める子を見て天地もうし
〔初出〕不明〔歌集〕未所収 ＊『全集』未収録

●熱病みて怪しきことを云ひつのる子もさのみとし筆とりぬわれ

〔初出〕不明　〔歌集〕未所収　＊『全集』未収録

【紙面①】大正三年三月一五日付「大阪毎日新聞」

覇王樹

與謝野晶子

覇王樹が翅すぼめて相寄れる鉢の
上にも雨ふる雨ふる
わが手なる柑子の實よりほのかなる
朱を散らす時降れる雨かな
炎をば名にしたりとは思へども花び
ら白く透りゆく
巴里なる市廳の屋根にひるがへる古
き旗なぞ思へる夕
濡れて行くセエヌの岸の敷石の道の
目に見ゆ畫過ぎの雨
丈高き素足の人のここちする青桐の
木の雨の色かな

【紙面②】大正六年九月七日付「大阪毎日新聞」

◇　與謝野晶子

暑ぐるし恨めしごとも懐かしきこ
とも忘れむ夏の心は

◇

形相の醜き夏はわれかとも汗にひ
たりて思ふ人かな

◇

夏の夜の曉近しなごつぶやくは戀
人めきし女ともだち

【紙面③】大正六年九月一日付「大阪毎日新聞」

◇　與謝野晶子

いなづまの幾筋落ちてそののち
の黒き木立はそよ風を吹く

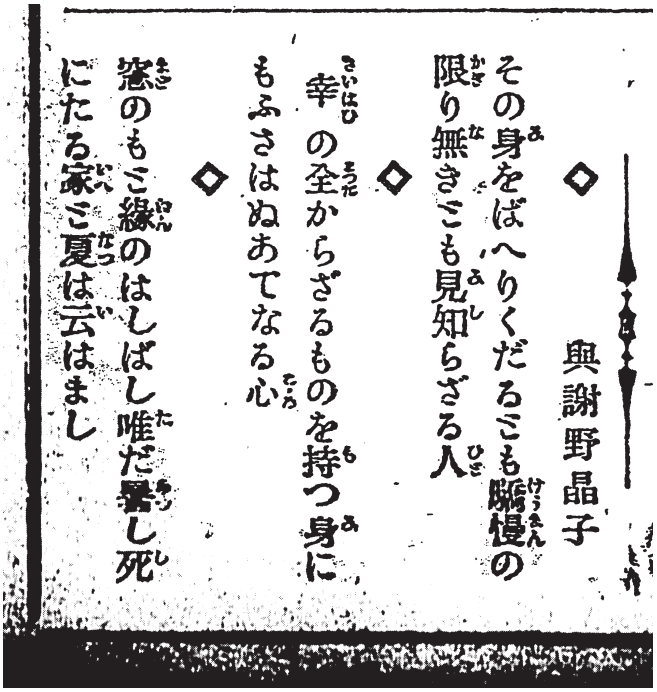
◇

こさきごとく針の重さ持つ如き夏
のものにしもれず心も

◇

何人も解けさし云はぬ秘密きて
一人向へる年月なるや

【紙面④】大正六年八月一七日付「大阪毎日新聞」



◇

與謝野晶子

その身をばへりくだるこも驕慢の
限り無きこも見知らざる人

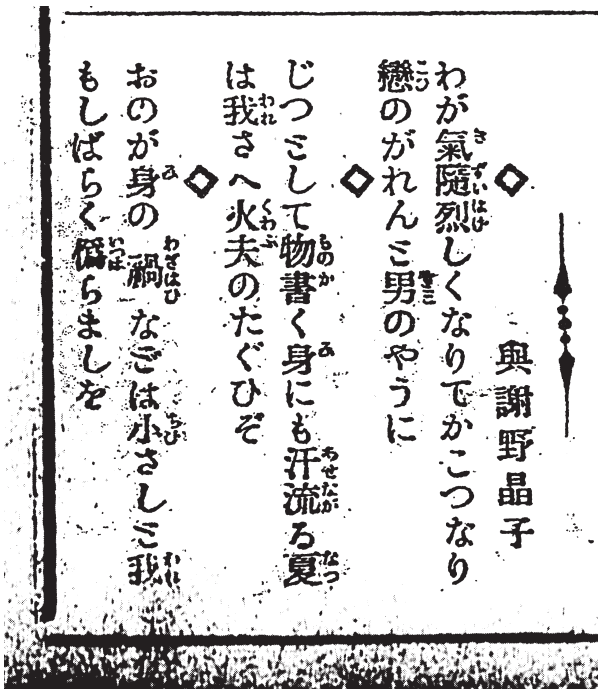
◇

幸の全からざるものを持つ身に
もふさはぬあてなる心

◇

窓のもこ緑のはしばし唯だ暑し死
にたる家こ夏は云はまし

【紙面⑤】大正六年八月一一日付「大阪毎日新聞」



◇

與謝野晶子

わが氣隨烈しくなりてかこつなり
戀のがれんこ男のやうに

◇

じつこして物書く身にも汗流る夏
は我さへ火夫のたぐひぞ

◇

おのが身の禍なごは小さしこ我
もしばらく偽らましを